



| | |
|--------------|---|
| Title | コンピュータプログラミングの演習 |
| Author(s) | 岩井, 大輔 |
| Citation | サイバーメディア・フォーラム. 2018, 18, p. 27-27 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/70429 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

コンピュータプログラミングの演習

岩井 大輔 (大阪大学 基礎工学研究科)

はじめに

基礎工学研究科システム科学科知能システム学コースでは、2年次前期にC言語を用いたコンピュータプログラミングの演習科目「コンピュータ基礎演習」を開講しています。この演習は必修科目であり、2年次後期の「コンピュータ工学演習」や3年次より始まる「学生実験」に接続します。4年次の「特別研究」(いわゆる卒論)で研究をしっかりと進められるよう、これらの演習・実験科目を通して、コース所属学生全員に高いプログラミング技能を身につけてもらうことを目的としています。ほとんどの学生にとって、本格的なプログラミングの演習は、この「コンピュータ基礎演習」が初めてというのが現状であり、プログラミングへの苦手意識を植え付けることなく、その技能を最大限伸ばすために最適な質・量の演習を模索しつつ設計しています。筆者は、2011年よりのべ7年間、本演習を担当して参りました。短い期間ではありますが、この間に変わったこと、変わらないこと、を中心に述べさせていただきます。

変わったこと

7年前と今を比べて、学生のプログラム環境は大きく変わったと感じています。7年前は、すべての学生がサイバーメディアセンターの端末を使って演習に取り組んでいましたが、今では3分の1程度の学生が自分のノートPCを教室に持ち込んで使用するようになりました。教室に用意されている端末よりも処理速度が早い、使い慣れた機器を使ってプログラミングを行いたい、というのが、その理由のようです。また、演習で作成したプログラムを復習したい場合に、いちいちUSBスティックメモリを使ってデータを移し替えるのが手間、という声も聞いています。現在、ノートPCを持参している学生は、教室の机の上に予め置かれているディスプレイ・キーボード・マウスを端へ寄せて、空いたスペースに自分のノートPCを置いて演習を行っているのですが、手狭であ

まり良い環境とは言えません。ノートPC持参の学生の数は年々増えていますので、教室内に導入する端末の数やその配置等、現状に合わせて工夫いただけるとありがたいなと感じています。

変わらないこと

近年、大学生のレベル低下が議論的となっていますが、少なくとも本演習においては、学生が演習に取り組む真摯な姿勢は7年前から全く変わりません。出席率は極めて高く、受講中の居眠り、ネットサーフィン等のサボりは皆無です。このような良い状況ですので、今年度から、学生の能力を測る指標としては全く意味を成していなかった出席点を廃止し、提出された課題に対する評価をより重視する成績評価へとシフトいたしました。受講生の出席状況は昨年度までと同様、極めて良好でした。実は、本演習は多くのTA(ほとんどが本コース卒業の院生)に支えられています。受講生が真面目に取り組んでいる一番の要因は、TAが親身に受講生に対応してくれていることにあると考えています。TAと受講生との間を繋ぐため、CLEを活用しています。具体的には、受講生は課題をCLEに提出し、TAがそれをチェックして評価(点数)案を筆者に提示します。筆者は提示された点数をCLE上で最終チェックします。色々使いにくい点もありますが、限られた予算の中で、これだけのサービスを提供いただいていることに、大変感謝しております。

おわりに

サイバーメディアセンターにおけるコンピュータプログラミング演習の現状について述べました。これからもセンターのサービスを積極活用し、演習の教育効果を向上させるべく、努めていきたいと考えています。